

第18回女子美ミラノ賞報告書

星知雅

2024年9月24日—2025年3月23日



はじめに

このたび、第18回女子美ミラノ賞を拝受してブレラ国立美術学院への半年間の留学、ミラノ滞在の機会を頂戴しまして、本学名誉理事長大村智先生、小倉文子学長、ミラノ賞審査の先生方、学生支援センターの皆様、女子美同窓会ミラノ支部の方々、ブレラ国立美術学院の清水哲郎先生、イタリア現地でお世話になった教育関係者の皆様の多大なご尽力に感謝申し上げます。イタリア留学を応援してくれた勤務する学校と家族にも感謝しています。また、イタリア生活をサポートしてくださったミラノの方々との温かい交流も忘れることができません。女子美で学び、勤務したご縁がミラノで再び繋がり、さらに広がったように感じています。半年間の贅沢な学びと思索の日々で得たことを活かし、自分にできることを未来に繋げて行きます。女子美生であることに感謝と誇りを感じる半年間を過ごすことができました。

■目次

はじめに

略歴

1. ミラノ滞在の動機と目的
2. ミラノ到着からブレラ国立美術学院の授業開始まで
3. ブレラ国立美術学院 Accademia di Belle Arti di Brera の授業
4. イタリアの学校見学
5. ORIECC レッジョ・エミリア現地研修ツアー
6. レッジョ・チルドレン主催の講演会・見学会
7. その他の活動
8. ミラノの生活
9. 今後の展望・目標

おすび

略歴

- 1999年 女子美術大学芸術学部芸術学科卒業 女子美術大学卒業論文賞受賞
- 1999年 - 2003年 青木絵画修復工房 油絵修復修行
- 2002年 内閣府主催「2002年東南アジア青年の船」参加青年
- 2005年 - 2011年 女子美術大学短期大学部造形学科デザインコース専任助手
- 2011年 - 2012年 横浜市馬場学童保育正指導員

2012年 - 造形教室「えいごでMONOづくり」造形計画・指導

2013年 - 2020年 (株)サクセスアカデミー (現ライクアカデミー) 学童指導員・造形プランナー認定

2014年 玉川大学通信教育部 小学校教諭二種免許取得

2020年 - 2023年 学校法人聖トマ学園聖マリア小学校教諭

2023年 - 学校法人聖トマ学園聖マリア小学校 図工専科講師

1. ミラノ滞在の動機と目的

女子美術大学の専任助手として勤務する中で初等科教育の重要性に気づいた。そして、子どもが自ら考える力、真に「生きる力」を身につけることのできる教育を目指して、初等科教育の免許を取得して小学校教員になった。しかし、「みんなで同じことを、同じペースで、同じやり方で行う」現在の教育システムに疑問を感じている。実際、集団行動ができない、授業を黙って受けることができない、小一プロブレムと言われる問題にも直面している。教育学者苫野一徳は『「学校」をつくり直す』で「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」を提唱している。それは、子ども達の個人の興味感心やペースに合わせて、個人を尊重しながらも仲間で助け合い、自分で問いを立てて、自分なりの仕方、自分なりの答えにたどり着く＝「探究の学び」を行う教育である。私が勤務している小学校においても、取り組み始めている。

「探究の学び」の実践を試行錯誤する中で、イタリア北部のレッジョ・エミリア市の保育現場で行われているレッジョ・エミリア・アプローチの文献を読み返した。「子ども達自ら対話をして、探究するプロジェクト学習」が特徴の子どもの主体性を重視するこの教育は、今後の小学校教育において、特にアートをツールにしていることから、新しい図工教育の実践にとって参考になると考えた。

さらに、文献を読むだけでなく現地で学びたいと思うようになり、2023年2月に短期間のレッジョ・エミリア、ローリス・マラグッツィ国際センターでの研修に参加した。そこで、アトリエリスタやペタゴジスタの講義を受け、ワークショップに参加した。アトリエリスタのプロジェクトの組み立て方を体験し、アーティストの制作過程における思考が、組み立ての基盤になっていることにも気が付いた。

そこで、実際にイタリアへ留学し、学び、生活し、人々や社会に触れて、イタリアの様々な教育を見学し、この先進的な教育が生まれた理由の一旦を探りたい。また、暗黙知になっているレッジョ・エミリア・アプローチを明確化して日本の教育現場で実践するために、ロ

ーリス・マラグッツィ国際センターを再訪して学びをもっと深めたい。また、レッジョ・エミリア・アプローチやブレラ国立美術学院での学びを日本の新たな図工教育と融合したいと考えた。

また、将来は日本でアトリエリスタの育成も考えていきたい。そのために、レッジョ・エミリア・アプローチで取り入れられているアトリエリスタの在り方についても学びたいと考えた。

2. ミラノ到着からブレラ国立美術学院の授業開始まで

2024年9月23日、日本を出発した。ヘルシンキ経由でミラノマルペンサ空港へ到着した。ミラノ在住の女子美同窓生でミラノ賞の先輩である古山春香さんが空港で出迎えて下さった。空港からミラノ市内ティバルディ通りに面した賑やかな地区のアパートへ移動した。大家さんに部屋を案内して頂き、私のミラノ生活が始まった。大家さんはご主人がイタリア人、奥様が日本人であった。ミラノ到着後すぐに行ったことは、滞在許可書 *Permesso di Soggiorno* の申請手続きである。アパート近くの郵便局で書類等を提出し、移民局のアポイントを受け取った。

10月4日にブレラ国立美術学院を初めて訪れた。美術学院の清水哲郎教授が学校内を案内してくださり、女子美の交換留学生と一緒にエラスムス事務局のエリザベッタさんから説明を受けた。受講授業について清水先生からアドバイスを頂き、10月中旬から11月末にかけて候補の授業のプレゼンテーションを受けた。最終的に、日本の学部に相当する3年制 *Triennio* の *Tecniche pittoriche* と大学院修士課程に相当する2年制 *Biennio* の *Pratiche creative per l'infanzia* を受講することに決めた。授業開始までの1か月あまりの間、ミラノ在住の教育関係者や子育て世代の方々を古山さんからご紹介頂き、その後の私の研究活動の関係づくりの基盤を築いて頂いた。

3. ブレラ国立美術学院 *Accademia di Belle Arti di Brera* の授業

私は、小学校に勤務し図工科を担当している。新しい図工教育を考えたいという目的から、表現の基礎から学ぶために *Triennio* の絵画科 *Pittura* の、絵画技法 *Tecniche pittoriche* と、子どもと芸術の関係を実践的に学ぶために、*Biennio* の芸術療法科 *Terapeutica Artistica* の子どものための創造的実践 *Pratiche creative per l'infanzia* を一学期受講した。ブレラ国立美術学院の授業時間は、日本と異なり、1時間目が9時から14時。2時間目が14時から19時と一日2時間である。休み時間や場所は設けられておらず、また個人が自由に制作できる教室は与えられていない。学生たちは、時間の管理や制作場所は自分で確保する。自分がやりたいことや質問があれば、教授に言葉で交渉することで可能になることもある。画材は自分で準備する。日本のように、事前に用意されているものやことはほとんど無いが、何事も自分で考えて自己責任により行う。また、授業はイタリア語で行われ、イタリア語で議論やプレゼンテーション

をする機会が求められるから、今後のミラノ賞受賞者にはイタリア語の習得を強く推奨する。

【絵画技法 Tecniche pittoriche】

清水哲郎教授による学部1年生向けの絵画技法の授業。月曜・火曜・水曜日の1時間目（9時から14時）の授業で、月曜日は理論を学び、火曜日と水曜日はモデル等による実技を行った。理論の授業では、芸術家の作品をスライドで見ながら、表現の基礎となる線・形・空間・色彩について講義により学んだ。そして、各テーマに沿った内容で、実技を行った。後半は、水彩絵の具、テンペラ、油絵の具、キャンバスの作り方の実践を行った。

特に興味関心を持ったのは、“Campo magnetico 磁場”とジョセフ・アルバースの色彩の配色の内容であった。前者は、芸術家はキャンバスや紙を前にしてその支持体の磁力を感じて表現をするのだという表現のアプローチについてである。講義で出会ったルーチョ・フォンタナの作品に魅了され、その後ミラノの美術館で多くの作品と対峙することになった。また、その後、**ものどもの、人と人は磁力で引き合わされている**。またそこに**美が存在する**という考えをあらゆる場面で耳にすることになった。後者は、色と色との相互作用による色彩の考えであった。清水先生から、個人的にも配色の見本を指導して頂き、最終試験のテーマにさせて頂いた。共に、これからの図工教育に取り入れたいと思った。イタリアの哲学的な考えを基にして実践へつなげる絵画技法の授業であった。



絵の具作りの授業の様子



ジョセフ・アルバースの色彩の配色

【子どものための想像的实践 Pratiche creative per l'infanzia】

アートセラピーの Silvia Mornati 教授による、大学院2年生対象の授業。受講者は私を含めて7名で、先生と学生が議論を重ね交流を深めながら制作に取り組んだ。木曜日の2時間目（14時～19時）の授業で、自然をテーマにした制作の講義と実践を行った。授業の初めに先生より指導されたことは、子どもの目線で、カタツムリのテンポで楽しんで制作を行うことである。本を2冊、石を使った制作、葉っぱのエコプリント、フロッタージュなど様々な技法、自然の素材を使って子どもに実践するための制作を行った。素材集めに美術学院近くの公園へ行ったり、自然をテーマにした現代アートのギャラリーへ見学に出かけたりすること

もあった。先生から、自然をテーマにした絵本や本を多く紹介して頂き、ブルーノ・ムナリーのワークショップや絵本に興味をもつきっかけとなり、ミラノ滞在中にムナリーの活動を研究することとなった。

特に興味深かったことは、木の枝や葉っぱで作った筆を使い、墨で自由に描いて偶然から生まれた線や形から、想像力を膨らませて物語を語る活動である。イタリア人は言葉で語ることを大切にする。想像力の育み方の一つを学んだ。また、最終課題は学んだことを基に、皆で一つの作品を共同制作した。自然由来の土・お茶・コーヒーなどを顔料にして、ハチミツとアラビアゴムとを混ぜて、葉っぱを布に印刷し、三角形のパネルに貼付して、モザイク展示を行った。議論を重ねて、制作する過程では、異文化を感じることが多かった。画材の種類や質、制作技術は日本や日本人の方が優れていると感じることもあった。しかし、展示をする上で光の捉え方や配置の仕方や考え方に、イタリア人の美的感覚を感じた。技術よりも、議論をし、語り合うことで考えを深めて新しいものを生み出すことを知った。また授業最終日には、私が勤務する日本の小学校での活動を、イタリア語でプレゼンテーションする機会を得た。イタリアと日本では教育システムが異なる。先生や学生達にとって興味深かったようだ。また、自ら語る機会を得て、皆とあっそう交流を深めることができた。



自然素材で筆を制作



自然をテーマに作品制作



モルナッティ先生とクラスメイトと



最終課題の共同制作

【最終試験】

2月24日から3月8日までが美術学院の試験期間であった。試験を受けるためには、自分でオンライン申し込みをする。出席日数が十分で教授の許可が下りれば受験可能となる。試験は一对一の口頭試験である。美術学院に限らず、イタリアは口頭試験が主流とのこと。事前に、作品に関する情報（制作過程や最終作品の写真など）を Google クラスルームで教授に提出した。試験当日は、自分の順番を待ち、作品を持参して教授にプレゼンテーションを行う。その場で教授から評価を提示され、自分で承認をして事務局より最終評価を書面で受け取る。場合によっては、承認を拒否して、再度試験を受けることも可能である。何事も自己責任のイタリアである。無事に評価を頂くことができた。

□ 絵画技法 Tecniche pittoriche

学んだことを基にして、教授にプレゼンテーションをして自分のテーマを決定し、最終制作を行った。私は、小学5年生の図工に実践する内容で、ジョセフ・アルバースの『配色の設計』から「透明の配色」のための見本作品と学習指導案を制作した。タイトルを「ジョセフ・アルバースの教室から 色の相互作用－透明な色を探究しよう－」とした。



□ 子どものための想像的实践 Pratiche creative per l'infanzia

授業で制作した作品をもとに、「物語」をテーマに作品を発展させて制作することが課題となった。私は、蛇腹本を使って、詩を書き、抹茶を顔料に彩色し、触ったり、匂いを嗅いだりと、五感を使って感じる絵本を制作した。タイトルを「感じる絵本」とした。



4. イタリアの学校見学

ミラノに滞在中、在伊の方や、ブレラ国立美術学院、研修会で知り合った方々のご縁により、現地の学校を見学する機会を得た。イタリアの様々な教育現場を見学することにより、イタリアの教育について考え、レッジョ・エミリア・アプローチ教育について理解を深め、また日本の教育との相違点や類似点を発見することで、教育について理解を深めることができた。

□ミラノ日本人学校

ミラノ日本人学校の1年担任海老沼先生を古山春香さんより紹介され、全校図工「ドロップペインティング」の活動に参加させて頂いた。ミラノ日本人学校は、1976年にイタリア在留の邦人児童生徒のために設立された小学部・中学部がある在外教育施設である。文部科学省より教員は派遣され、教科書も文部科学省から支給されている。12月11日には、全校児童・生徒で制作した作品を展示した第32回ミラノ日本人学校作品展の見学にも訪れた。私の訪問や質問に丁寧に対応してくださった海老沼先生をはじめミラノ日本人学校の先生方に変感謝している。

日時：2024年11月29日金曜日 9時～12時

場所：ミラノ日本人学校 体育館 Via Arzaga, 10, 20146 Milano

参加者：ミラノ日本人学校 小学一年生～中学三年生 62名

講師：図工科小島先生 音楽科小里先生 ミラノ日本人学校教員12名

内容：ミラノ日本人学校の全校児童生徒（小学一年生から中学三年生）で、2時間目～3時間目を利用してドロップペインティングに挑戦して、作品を完成させた。当日、共同制作場所の体育館の会場準備、全校児童の制作過程を見学、片付け等を行い、児童・生徒、先生方と交流することができた。共同制作のテーマはグスタフ・ホルストの組曲「惑星」から「木星」「火星」「海王星」「水星」とし、全校児童・生徒を4班に分けて、各担当のテーマの曲を聴き、班長の6年生を中心にして、制作を行った。中学生は小学生を支える役割を担った。制作技法は、ジャクソン・ポロックのドロップペインティングに挑戦した。

所感：異年齢の少人数の共同制作では、中学生の存在により、小学生が安心感をもって活動できる様子が見られた。ドロップペインティングは、汚れることや低学年児童の気分の高揚が想定されるが、段取りよく、落ち着いて行っていた。偶然から生まれる線や色を楽しみ、子ども達の心が解放されていく様子が見られた。片付け、掃除も全児童生徒で丁寧に行い、日本の教育の良さを再確認できた。

図工科の小島先生にお話を伺い、イタリアのブルーノ・ムナリーからインスパイヤされた図工教育を見せて頂き、影響を受けた。また、イタリアで図工材料を手に入れることは難しく、廃材等を駆使するなど画材調達の現状を知ることができた。レッジョ・エミリアでリサイクル施設 Remida が誕生した背景の理由の一つではないかと感じた。



共同制作の様子



ミラノ日本人学校作品展

□ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミー（補習校）

イタリアの学校に通学している邦人の幼児、児童が日本語の基礎的知識・技能および日本文化を学ぶため毎週土曜日のみ開校される学校である。ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミーは、2023年から日本政府援助対象校として登録された。現在、幼稚部から小学4年生までが在籍している。ブレラ国立美術学院のモルナッティ先生より、ミラノ在留の青木友紀さんを紹介され、青木さんから補習校の磯会里子校長を紹介された。磯先生は、ミラノ日本人学校の教員を経験され、ミラノで裏千家道場を開き、茶道の先生もされている。2020年に補習校を開き、子ども達に国語指導を行っている。また、現地のインターナショナルスクールでも教員をされている。私が裏千家茶道の経験があったため、ミラノ裏千家道場に伺った。その後滞在中に度々交流する機会を頂き、教育について考えを深めることができた。磯先生にご紹介くださった青木友紀さんに深く感謝している。

【4年生国語授業担当及び職員会議の見学】

日時：2025年1月25日土曜日 11時15分～15時頃

場所：ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミー（裏千家道場内） Via Andrea Ponti, 1

対象者：イタリア ミラノ在留邦人 4年生女児2名

内容：4年生国語の授業の実施と職員会議（当日別校舎で避難訓練が実施された）の見学

所感：異国で暮らす日本の子ども達にとって、日本人としてのアイデンティティを形成するために国語力は重要である。補習校では限られた人員と学習時間で日本の教科書を使って、国語の指導をしていた。また、子どもたちの安全を守るために、避難訓練を定期的に行っている先生方の努力を知ることができた。先生方の熱意から、教育に必要なことを改めて考えることができた。

また、イタリアの教育を受け補習校で手伝いをしている渡辺ユリアさんとお話する機会を得た。イタリア教育の現状を教えて頂き、イタリアの保守的な教育と対照的に新しいことに柔軟に対応し、取り入れている日本の教育の良さに気が付くことができた。

【オープンデイの見学】

日時：2025年2月1日土曜日 11:30～13:30

場所：La Locomotiva di Momo Tolsto 内 ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミー（幼稚部・小学1年・2年） Via Leone Tolstoi, 39, 20146 Milano

参加者：令和7年度ミラノ補習校へ入学・編入希望者の保護者 10名程

説明：磯会里子先生（ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミー校長）

内容：・オープンデイ説明会と授業見学（校長 磯会里子先生・幼稚部西村先生、渡辺先生・小学1年山下先生・小学2年青木先生）

幼稚部、小学1年生、2年生の授業見学。幼稚部15名、小学1年7人、小学2年6人在籍。幼稚部は、節分の時期で豆まきを行った。日本の学校で行うのと同様に、掃除指導をしていた。小学1年、2年の国語の授業では、教科書を使って書く・読む・話す認知能力を育む教育をしっかりと行う様子がみられた。

所感：現地校に通う日本人の子ども達の様子を見学し、磯校長先生や他の先生方の熱心や工夫を知ることが出来た。日本文化や日本語の指導をしっかりとされていた。掃除は日本の教育の特徴の一つである。日本人として当たり前のことも、異国では特別であること、日本の教育の良いところに気が付くことができた。



4年生の国語の授業



オープンデイ 幼稚部の豆まき

【茶道体験の補助】

日時：2025年2月22日土曜日 10時15分～13時15分 準備（8時半から）

場所：ミラノ 裏千家道場 Via Andrea Ponti, 1, 20143 Milano

対象者：幼稚部15名 小学3年生4名 小学4年生4名

講師：磯会里子先生（補習校校長・裏千家） 小林さん 富永さん（裏千家社中）

内容：補習校に通う幼稚部、小学3年生・4年生に向けて 茶道による日本文化体験

①磯先生による スライドショーと説明による抹茶についてのレクチャー

②子どもたちの座禅体験

③茶道体験 小学3・4年生がお茶とお菓子のお運びをして、全幼児・児童がお菓子と抹茶を頂く体験をした。保護者がその様子を見学していた。磯先生と裏千家の方によるお点前と頂き方の指導。私は、水屋でお茶を点て、お運びの児童のサポートを行った。

④磯先生によるお炭の拝見と、抹茶についての説明

所感：日本人としてのアイデンティティ形成のために、磯先生が行っている文化活動から、先生の子ども達への思いを感じることができた。ミラノ滞在中に、先生と一緒に活動できたことは教師として貴重な体験であった。イタリア文化と日本人について、日本の教育について、私見を広めることができた。



座禅体験



茶道体験

□Asilo nido - primavera - scuola materna Ada Bolchini Dell'Acqua - Milano

ブレラ国立美術学院で出会った青木友紀さんが20年程勤務する乳児保育所、幼児学校の見学をさせて頂いた。青木さんは、日本で幼稚園の先生を経験し、ブレラ国立美術学院で学び、子どもたちにアートのクラスを担当し、保育の補助もしている。この私立学校は、カトリック修道会が母体となり1953年に設立された。現在はアダボルキーニデラックア財団の管理下にある。生後3か月～6歳児まで200人あまりが在籍するミラノでも人気の学校。ミラノ日本人学校からも近く、インターナショナルスクールのプリティッシュキンダーガーデンが同じ施設内にあるため、邦人の乳幼児も数名在籍している。この学校の建物は著名な建築家 マルコ・ザヌーゾによる。学校内にある礼拝堂の装飾は、ルーチョ・フォンタナによるものである。有名なピンク色の「十字架の道行 (Via Crucis)」(現在はミラノ司教区博物館に保存)や、祭壇の四隅に配置された4体の天使像を手掛けた。

日時：2025年2月20日木曜日 10時半～12時

場所：Via Cascina Corba, 97, 20121 Milano

講師：青木友紀さん（アート担当講師）

内容：学校内の施設と保育の様子を見学。見学当日は、幼稚園生が縦割り活動を行っていた。異年齢交流は、人間関係を形成するために行っているとのこと。イタリアでは職員は乳児3人に一人、幼児5人に1人を必要としている。イタリアで近年取り入れられている「Primi voli in lettura」という教育本を見せて頂いた。これは、未就学児の読み書きをサポートするものである。

所感：イタリアにおいても、特徴ある私立学校のニーズが高まっていることを感じた。園児確保のためにインターナショナルスクールを併設したり、教育本を導入したり、アートクラスを開いたりと経営努力をされていた。青木さんの話によると、北イタリアでは、レージョ・エミリアの教育をリスペクトしているが、その本質を十分に理解して取り入れている学

校は少ないようだ。保育者の研修制度等は日本のように十分ではなく、スキルに個人差がある。園内の衛生面において、疑問を感じる状況も目にした。保育者不足はイタリアでも課題のようだ。イタリアの教育現場の課題や現状を知り、日本の教育や教育者の質の高さを改めて感じた。



教育本

“Primi voli in lettura”

□Scuola Munari - Parma

礼拝堂のフオンタナの装飾

ミラノ留学中にブルーノ・ムナーリのワークショップや子どものための絵本に出会った。ムナーリの教育の考えに大変感銘を受け、日本の図工教育に活かせないかと情報を集めた。また、レッジョ・エミリア・アプローチとの共通点も発見した。レッジョ・エミリア現地研修ツアーで、ムナーリ研究者の東京成徳大学藤田寿伸先生とお会いすることができた。先生より、パルマにあるブルーノ・ムナーリにインスパイアされた Scuola Mundli ムナーリ学校のヤコポ校長をレッジョ・エミリアでご紹介頂きお会いすることができた。後日、ヤコポ校長に連絡をして、ミラノから日帰りでパルマのムナーリ学校を訪問し、小学校の授業を見学することができた。Scuola Mundli は 1977 年に設立され、ムナーリからも認められた世界で最初の学校である。学校のロゴデザインはブルーノ・ムナーリによる。現校長のヤコポさんのお母様が創立した。生後 6 か月～小学 5 年生（イタリアは小学 5 年が小学校の最高学年）の 100 人～120 人が在籍する学校である。藤田先生からは、このご縁だけでなく、ムナーリ研究についての情報も多く頂戴し、大変感謝している。

日時：2025 年 2 月 25 日 火曜日 12 時～15 時

場所：Str. S. Donato, 1/B, 43122 Parma

講師：Casoli Jacopo 校長

内容：学校見学と給食体験。ヤコポ校長との対話。

【学校見学】

パルマ駅からバスで 20 分ほどの商業施設内にある小規模学校。学内には幼稚部と小学部

がある。モンテッソーリラボ、ムナーリラボ、キッチン、図書施設などがPiazzaを中心にして放射線状に配置されている。屋外には運動場とプールがある。校長先生の案内により、学校内を見学。絵本や玩具、ワークショップに使用する材料などが至る所に美しく配置されていた。子ども達がそれぞれ居心地の良い場所を見つけることができる空間作りがされていた。小学部には、英語と日本語の授業がある。日本語を学ぶのは、異文化を学ぶためとのことである。

【給食】5年生3人の女儿（アンナ・アリアンナ・アンジェリカ）と給食を共にした。円形のテーブルに4人で座り、担当の児童がテーブルクロスをテーブルにかけて、テーブルセッティングや片付けを行っていた。当日のメニューは、Primo（トマトのパスタ）Secondo（チーズ2種、インゲン）であった。各自で料理を取りにいき、全員が食べ終わった後におかわりが可能。給食の時間は、30～40分。女儿たちと日本について、パルマについて話をしながら頂いた。

【1年生音楽の授業見学】

先生（日本人チヒロさんヤマハメソッド）がピアノを弾きながら、皆で歌を歌う。歌いたくない児童が数名教室内にいるが、教室に用意されている玩具をしたり、本を読んだりして好きなように過ごしていた。先生も児童も特に違うことをする子を咎めることはない。そのため、やりたくない児童も落ち着いた様子で教室にいた。補助の先生が児童の様子を時々見に来ていた。担任がいない学校のため、児童は教室を移動せず、先生が移動をする。高学年児童は、先生の荷物を運ぶ手伝いをしていた。子ども達でクラスを管理するため、子どもに責任感が生まれるようだ。

【校長先生との対話・学校の説明】

ブルーノ・ムナーリの絵本の原書を多数見せて頂いた。ムナーリインスパイヤの団体 *dacosa nascecosa* の情報を教えて頂いた。ブルーノ・ムナーリの活動について熱意をもって語って頂いた。今後も同じ教育に携わるもの同士で交流を深めていく約束をすることができた。

所感：ムナーリ学校では、少人数の良さを活かした家庭的な教育がされていた。子ども達は穏やかで満足した様子で学校生活を送っていた。給食時に交流した女儿たちも、学校が大好きだと教えてくれた。その理由を考えた。子ども達には皆個性がある。画一的な教育には限界がある。子ども一人一人を尊重するムナーリ学校の教育にその理由の一つがあると考え。見学した1年生の音楽の授業では、教師が大きな声を出すこともなく、全ての子どもが尊重され、安心してクラスにいた。そのため子ども達は、授業も休み時間も同じテンションで過ごしていた。静かで穏やかな学校はそのためではないか。また、児童が落ち着く空間作りの工夫がされていた。日本とは異なる学校の雰囲気が印象的だった。日本の今後の教育に参考になることを教えて頂いた。



ムナーリラボ



居心地のよい空間

□Scuola dell'infanzia e primaria paritarie Montessori - Milano

ミラノ日本人学校図工科の小島先生の紹介により、ミラノのモンテッソーリ学校のムナーリラボの授業を小島先生と見学させていただいた。1984年に設立されたモンテッソーリ学校は、ACミランの本拠地サン・シーロのスタジアムから徒歩10分ほどの所にあり、幼稚園と小学部が併設されている。ムナーリラボは、モンテッソーリメソッドの学校にあることが多いようだ。ラボを担当されているクリスティーナ先生は、ムナーリの直弟子 Michela Dezzani からムナーリ教育法を学び、ムナーリラボでアートの授業を担当している。

日時：2025年2月28日金曜日 11時～12時

場所：Via Privata Arosio, 3, 20148 Milano

講師：Maria Cristina Faccin 先生

授業対象者：小学2年生19名

内容：陶芸粘土 Argira をつかって、粘土の導入となる最初の授業を見学。ブルーノ・ムナーリがFaenzaの国際陶磁器博物館で子ども達におこなった粘土のワークショップの方法をクリスティーナ先生が再現して見せて頂いた。

【授業の様子】

1. 先生が子どもたちに大きな塊の粘土をカットして配布をする。

先生：「粘土をさわってどんなかんじかな？においは？感触は？」

こども①：「草のにおい」 こども②：「キャベツのにおい」 こども③：「雨のあとの土のにおい」

2. 先生：「では粘土を丸い形にしていきましょう。今日は道具を使わないよ。」

「手をつかってピザを作っていこう！」

- こども達:手を使って、たたいて平にする
3. 先生:「ピザを持ち上げて、机の上はどうなっているかな？」
- こども達:「しっけがあるね」「赤いね」など
4. 先生:「粘土をなでなでしてみよう。感じてみよう。」
5. 先生:「粘土を親指でブスブス押してみよう」「なんに見えるかな？」
- こども④:「火山みたいだね」 こども⑤:「ハチの巣みたいだ」 こども⑥:「貝殻みたい」
- こども⑦:「地層みたいだね」 こども⑧:「水玉みたい」
- 先生はこども達の発見を促していく
6. 先生:「さあ あなたたちはアフリカの原始人だよ。初めて粘土を発見して触ってみたんだよ。」
- こども達:粘土を丸いボール状にする→たたいて平にする→表面を手でなでてツルツルにする
7. 先生:「粘土を指でつまんでみよう」
- こども達:粘土をつまむ
- 先生が霧吹きで水を追加する(粘土を指でつまむのは、粘土に水分を与えるためでもあるようだ)
8. こども達:この授業3回目のピザの形にする→細かく手でちぎる
- 先生:「粘土と紙の違いはなんだろうね」
- こども⑨:「粘土は戻るけど 紙は戻らないよ」(以前の張り子の制作を思い出している様子)
9. 先生:「ちぎった粘土でへびをつくろう」
- ～本来の授業はここで終わりだが、特別に道具を使った授業を行って見せて頂いた～
10. 特に陶芸用ではなく櫛や歯ブラシなど日常使う跡をつける道具類を提示
- 先生:「道具を使ってみよう」
- こども達:とても嬉しい様子で道具に飛びつく。自由に粘土に跡をつけたり、つついたり、切ったりする。
11. 最後に一つのバケツに子ども達自ら粘土を戻す
- 先生:「では 今日の授業は終わります。片付けをしましょう。」
- 完成品を作ることが目的ではなく、粘土と対峙して感覚をフルに使ってものとの対話の過程を楽しみ、ものを探究することを目的としている。最後に粘土を一つにまとめて、教室を全員で掃除をして終了する。

所感：ムナーリラボを見学し、子どもと先生との時間や空間を共有できた体験は大きかった。ムナーリラボの教育は、完成作品を作ることが目的ではなく、過程を重視している。そのため、年間を通して作品を持ち帰ることは僅かだ（小島先生のお話）。粘土のワークショップは、学年が上がるにつれて、粘土の感触を探究する授業から発展して、作品を制作するようになるとのこと。クリスティーナ先生は決して子どもが作ったものを褒めたりはしなかった。モンテッソーリ学校は、評価をしない。子ども達に正解を求めることがないため、純粹に過程を楽しむことができる。参加することを拒んだり、手が止まったりしている児童がないことも驚きであった。表現することに正解はないのに、日本では答えを求め、大人の評価を気にして、表現を苦手に感じてしまう子どもがいる。過程を大事にして探究を楽しむことは、レッジョ・エミリア・アプローチにも共通することだ。これからの日本の図工教育にも活かしていきたい。また、全員で同じ大きな机で活動する方法も参考にしたい。指導者が全児童を見渡すことができる。また子ども達も友人との探究の時間を共有することができる。ムナーリのワークショップを見学し、レッジョ・エミリア・アプローチとムナーリのワークショップに共通する考えを見ることができ、大変感銘を受けた。貴重な機会を作って頂き、小島先生に大変感謝している。



粘土に使う道具類

最後は粘土をまとめる

小学2年生の粘土の授業

5. ORIECC レッジョ・エミリア現地研修ツアー

ミラノ留学中に、以前よりお世話になっている神戸親和大学教育学部教育学科の森眞理教授よりお誘いして頂き、ORIECC 和泉誠氏と森教授が企画した、ミラノ及びレッジョ・エミリアでの研修（2025年2月10日 - 14日）に参加することができた。研修では、日本の教育関係者、保育関係者26名が参加し、藤田寿伸先生（東京成徳大学）、上垣内伸子先生（お茶の水女子大学）、久保寺節子先生（青山学院大学）など、専門家の先生方とも議論を交わすことができた。ミラノのからツアーに合流し、研修中はレッジョ・エミリアに滞在した。

□ミラノ レッジーナ・ムンディ学校における研修と交流

日時：2月10日（月）10時～14時45分

場所：Viale Corsica 82 20137 Milano

講師：Sig.a Isabella Sig.Luca Sig.Mauro

内容：ミラノ レッジーナ・ムンディ幼稚園・小学校の見学と文化交流。地下体育室にて歓迎のセレモニーから始まり、園長イザベラ先生の案内により、幼稚園の見学。その後、ルカ先生による小学校クラスの見学。小学校見学の最後には、日本人参加者が分かれて、書道とけん玉の文化交流を行った。私は青山学院大学の久保寺節子先生と一緒に書道を企画して、小学4年生の2クラスに書道を体験してもらった。書道のクイズとデモンストレーション、墨と筆、半紙を使って児童全員で漢字を書いた。その後、参加メンバーによる先生方への茶道体験。最後に、幼稚園・小学校の先生、校長先生との質疑応答があった。校長先生から「今日の社会の問題を一言でいうのなら」という問いかけがあった。「Solitudine:孤立が問題」と校長より意見があった。孤立に対抗することが教育の仕事と考えていること、イタリア社会は移民が多く孤立を抱える家庭、児童もいることなどの説明があった。孤立に対抗するために大切なことは、三つのC(Condivisione 共有すること Convivenza 共に生きること Costruzione 構築すること)であるとのことがあった。

所感：私立の独自の教育方針に基づいた学校であり、様々な特色ある取り組みが考えられていた。2025年度の学校のテーマ「経験は先生」の具体例を、子どもの作品や植物を育てる活動から見ることができた。イタリアの小学生に書道体験をしたことは興味深かった。墨や筆を初めて扱うことは難しいと考えていたが、子ども達は道具を慎重に扱い、汚すことなく書くことができた。漢字クイズでは、子ども達は漢字の成り立ちに興味を抱いたようだ。アルファベットには書き順がないため、漢字の書き順や筆の持ち方について質問があった。先生方との質疑応答では、保健衛生に関して、日伊での違いを感じた。最後の校長の問いかけは、全世界の現代の問題である。教育ができることを私たちも考えていきたい。



小学4年生の書道体験

□レッジョ・チルドレン ローリス・マラグッツィ国際センターにて研修・アトリエ体験

日時：2月11日（火）10時～15時30分/2月12日（水）10時～16時

場所：Reggio Children International Centre Viale B. Ramazzini, 72, 42124 Reggio nell'Emilia

講師：ロレッラ・トランコッシ（ペタゴジスタ） 1989年～ローリス・マラグッツィと共に働く。5年間小学校勤務。1998年～ドキュメンテーションセンター、2007年からレッジョ・チルドレンの国際センターのアトリエとプロジェクトツィオーネ運営に携わっている。

クラウディオ（アトリエリスタ） アトリエ見学の案内役

マルコ（アトリエリスタ） アトリエ体験の指導者

内容

【レッジョ・エミリア・アプローチについて】

第1部

レッジョ・エミリア・アプローチには、2つの課題がある。それは、すべての子どもと家族のための教育の権利に応えること、教育的研究を深めることである。レッジョの教育は、すべての人のための質の高い教育を目指している。

“The art of research already exists in the hands of children acutely sensitive to the pleasure of surprise.

The pleasure of learning, of knowing, of understanding is one of the first, fundamental

sensations each human being expects from experiences faced alone or with others.”

Loris Malaguzzi

レッジョ・エミリアの街は人口172,833人（1990年代）。第二次世界大戦後「Asilo del Popolo」が作られた。ドイツ軍がイタリアを去り、戦車が残った。市民（女性）は戦車を売って、学校を作ろうと決め市民の手により学校が作られた。1963年からレッジョ・エミリア市が学校を運営している。子ども達は街の財産であり、幼い時点で市民である。その例として、「靴」のプロジェクトツィオーネと「アリオスト劇場の緞帳」のプロジェクトについて話があった。レッジョ・エミリア市には80の乳幼児学校があり、33校がレッジョ・エミリア・アプローチの自治体立幼児教育施設、19校がカトリック、14校が国立、14校が私立である。乳児保育所の全施設の定員は1769名、受入れ率57.12%である。幼児学校の全施設の定員は3943人、受入れ率98.62%である。子どもと教師の割合は、3～9か月の子ども12人に教師2.5人。10～18か月の子ども14人に大人2.5人。19～24か月の子ども12人に教師2～3人。25～32か月の子ども24人に教師3人を配置している。教師は週30～31時間を子どもと直接関わる仕事に充てる。週6時間は研修やミーティングに充てる。ペタゴジスタは大学の教育学を卒業し、芸術家アトリエリスタが全ての学校にいる。調理師は各校1人以上配置されている。

各学校には、大小のピアッツァがある。レッジョ・エミリア・アブローチにおいて、「理論と実践」が大事であり、常に実践の場において経験をすることが大事である。また、この教育にメソッドはない。もう一つの大事なことは、「環境」である。ヴィゴツキーの考え「環境は第三の教師である（発達最近接領域）」にも当てはまる。年齢によって、違う空間を用意する必要があり、空間も子どもと一緒に変化していかなければならない。また、クラスは「子どものもの」である。教師一個人が空間を変えることはできず、他者と議論をし、教育のアイデンティティを構築していく。特に家庭、街の人々との協力が重要である。

第2部

根本的な問い

「誰のために空間を用意するのか」

「何を学びと考えているのか」

「なぜこのプロジェクトをするのか」

教師は子どものイメージをどのように思っているのか考えるべきである。おそらく、教師自身の体験と勉強してきたことで子どものイメージはできている。そのことを反省することが重要である。現代の学校は、20世紀初頭の教育論からできている。月齢18か月の子どもたちはどんな権利を持っているのだろうか。何を学べるのだろうか。大人たちは「何もできない」「能力を持たない子ども」と思っている。教師がこのような想像性に欠けた、子どもをコントロールしようとする発想を持つことは危険「教師＝命令する人」になってしまう。その考えを変えるために、子どもを観察すること、想像することが重要である。子ども達は毎日知識を積み重ねて、周囲の世界を探検している。偶然ではなく、真剣に世界のものを実験しているのである。子ども達は研究者（探究者）である。研究者はどこにいるのか。それは Laboratorio である。子どもたちには、研究（探究）するラボが必要なのだ。その研究者の責任者は、教師たちである。子ども達がラボに入る前から、その空間を用意する必要がある。教師は日々子どもの発想に応える仕事がある。（アトリエだけがラボではない。幼児学校すべてである。）

「学びにおいて大切なことは美的感覚（bellezza）を持ち維持すること」である。「学びにおいて驚き体験」が重要である。美は単純に物質から生まれるだけでなく、感覚や研究の文脈からも生まれる。研究の場所がアトリエであって、たくさんの素材が用意されていることがよい環境ではなく、ある特定のアイデアに基づいて用意されるべきである。「子どもが自分で活動できる空間をつくること」「素材が子どもに話しかけてくる」「学校全体がアトリエである」ことが大切なのだ。

【ドキュメンテーションについて】

プロセスが一番重要である。教育者も研究者（探究者）であるから、主人公（子ども）からデータ（イメージ/会話（言葉）/学びのプロセス）を収集してドキュメンテーションを作る。プロセスを書いたり、描いたり、表や記号をつけたり、子ども達の違いを比べながら記録をする。その形式は、パワーポイントにしたり、本にしたり、Visual diary にしたり、様々である。大事なことは、教師は子どもたちの活動の状況の最中にいなければならない、（外から撮影する）カメラマンではない。ドキュメンテーションとは沢山の写真やビデオを記録することではない。プロジェクトが大事なのではなく、子どもたちの興味関心を支えること、探究している時間を守ることが大事なのだ。

最後に、「子ども達を信じるのが大切」とのメッセージを頂いた。子どもの能力、可能性を信じる。子どもに耳を傾け、未来のために手助けをすること。世界では、悲劇がおきているが、人類には希望がある。人がつくりだすものは、素晴らしいと信じること。「美を感じた人間は、困難なことに向かい合うことができるだろう」「美という感覚を体験した人は、不公平、乱暴に対応できる人間に育つ」のだと。

【ローリス・マラグッツィ国際センターのアトリエ見学】

ローリス・マラグッツィ国際センター内にある10のアトリエのアトリエリスタの解説付き見学ツアー

【アトリエ体験 事前講義】

アトリエリスタ Marco（アトリエリスタ10年の画家）による写真のアトリエ体験。私たちは世界を探究する能力をもっている。アーティストは、表現することを通して、世界を探究する人である。グレゴリー・ベイトソンは「人間がものとの関係性に敏感である」と述べている。我々は磁石のような引き合う関係性をもっているから、アトリエリスタが美的バイブレーションを感じられる空間を作ることが重要である。また、美しいことが重要だ。その空間（アトリエ）にとって重要なポイントは、光の質、外の空間との関係性、表現のツール、身体の姿勢を可能にする（どんな姿勢でもできるようにする）、ドキュメンテーションである。子どもは研究者（探究者）であるから、日々新しい世界を探究しているアーティスト（子どもと同じように）を学校において、子どもと一緒に探究を楽しむのである。ワクワクすることが人間の学びにとって大事なことである。アトリエリスタは、アーティストとして学校の中に存在しているのだ。

【アトリエ体験 実践】

「Disegnare la luce」 カメラを通して光とは何かを探究するもの。6人グループに分かれて、スマートフォンを使って「動き」を言葉で表現して、撮影した作品を発表した。大切なこと

は、完成品ではなく、過程が大事である。何をしたいのかイメージをもって活動をすることで、メンバーで話し合ったアイデアがドキュメンテーションになる。大人が実際にやってみることで、表現の知識が子どもと行う時に大事なのだ。

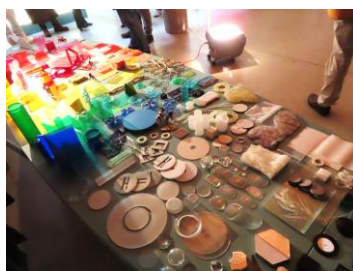
所感：私にとって、ローリス・マラグッツィ国際センターでの講義は2度目（一度目は2022年2月）であった。今回のミラノ留学により、イタリア語やイタリア人の考え、イタリア社会について理解が深まったためか、以前より理解し易く、明確になったことが多かった。特に、印象的であったのは、探究のプロセスは、考え、実践して、話し合うこと。学びにおいて驚きとワクワクが大切であること。子どもは生まれたときから探究者（研究者）であるから、探究する空間を大人が用意してあげるべきだということ。アトリエリスタは特別な教育をされたわけではなく、ワクワクを探究するアーティストとして、子どもと一緒に探究する人であること。「美」を大事にしていることである。私が目指す、アーティストが教育現場に参加する新しい教育のヒントを得ることができた。アトリエは実験室であるという考えは興味深く、参考にしていきたい。子どもによって、時代によって、教育は変わらなければならない。子どもに対して既存のイメージではなく、今ここにいる子どもに目を向けて、観察し、想像して、子どもと一緒に楽しく探究をしていく教師になりたいと思った。



ローリス・マラグッツィ国際センター



写真のアトリエ



光のアトリエ

□ レッジョ・チルドレン REMIDA 小学生のワークショップ観察と学び合い

日時：2月13日（木） 9時～10時30分

場所：Remida, il Centro di Riciclaggio Creativo Via Flavio Gioia 4, Reggio Emilia

講師：Remida スタッフ

内容

【Remida の説明】

2024年9月に現在の場所に移転をした。建物はイギリス人彫刻家 David Tremlett によってリノベーションされた（ブレラ国立美術学院において彼の講演を聞く機会を得た。）レミダはレッジョ・チルドレン財団のプロジェクトの一部である。レミダという名称は、ギリシャ神話のミダス王（イタリア語で Remida）の意味もかけられている。魔法の指であらゆるものを金に変えた王のように、不要な素材を新たなものに活用するという願いが込められている。

見学当日、小学2年生の授業「広がる学校（Scuola Diffusa）」が行われていた。児童たちは「音」をテーマに素材を探究し、図や言葉で表現していた。レゴ財団との共同研究の場であるオレンジエリアでは、遊びと学びの研究を行っていた。デジタル世代の新しい技術による遊びを通じた学びのコーナー、マゼンタ・エリアという可動式の什器があるミーティングスペース、古本のスペース（興味のある本は持ち帰ることができる。後日、本を持参することで還元する。）、リサイクル素材スペース、シアタースペース、探究スペースがある。リサイクル素材は、製品として使用されなかった色々な理由から未使用の新しい廃棄物物資である。それらの素材を使って、子どものための研修やワークショップ、研究活動を行っている。また、地域の学校や教育団体に無償で素材を提供している。個人ではなく、学校や教会などの団体に限定されている。素材の使い方を指導することではなく、素材の可能性を探究することを目的としている。素材は環境の持続可能性について語るための言葉の源泉であり、環境の持続性について語ることができ、同時に社会的な持続可能性についても語ることができるものである。また、素材は不完全なものであり不適合なものである。不完全であることの権利、すべてが同じでなく、また奇妙でないという権利についても語ることができる。

質問

星：「見学している授業は、何の授業ですか。通常の授業に組み込まれているのですか。」

Remida スタッフ：「小学校の授業には educatione civica という道徳の授業のようなものがあります。週に2時間ほど学校の授業に組まれています。学校の教師によって、何を扱うかは自由です。その授業時間をつかって、レミダに学習にきています。」

所感：実際に小学生の授業を見学できたことは興味深かった。子どもが「音」をテーマに取り組むその様子は、机に向かってきちんと座って行うものではなく、それぞれのグループが自分たちで心地よい所を見つけて座ったり、寝転んだりして行っていた。レッジョ・エミリア・アプローチが大切にしていることだ。先生方は児童を観察して、サポートをしていた。子ども達の集中力や興味が切れると、休憩を促したり、違う素材やアプローチを提案したりしていた。時々、教師たちが集まって相談している場面もあった。試行錯誤をしながら行う

様子を見ることができた。子どもに向き合って臨機応変に対応し、生きた教育をしている現場に立ち会うことができたのはとても大きい経験であった。



REMIDA 外観



リサイクル素材スペース



古本のスペース

David Tremlett の作品オルガンパイプ

□レッジョ・チルドレン ローリス・マラグッツィ国際センター ドキュメンテーションセンター訪問

日時：2月13日（木） 14時30分～16時

場所：ローリス・マラグッツィ国際センター内

講師：Lucia（教師・研修の指導者）

内容：ドキュメンテーションセンターは、ローリス・マラグッツィが1980年代にはアイデアを考えていた場所である。学校とは別の教育施設が必要と考えていた。1963年に始まった教育では、学校の活動を可視化すること、地域との関係をもつこと、地域の人々に公開することを行った。この目的のために、ドキュメンテーションセンターは開かれた。ドキュメンテーションを集めて、活用する場であり、教育研究所として過去だけでなく、現在、未来の教育について研究する施設である。ドキュメンテーションは単なる記録ではなく、生きた資料と考えている。過去の子どもたちの経験を今にどう活かすことができるのかを研究している。レッジョ・エミリア・アプローチはメソッドではないので、次の時代・場所で教育を変化していく必要があるため、常に教育について研究をしている。ドキュメンテーションセンターは、1990年代に開設され、2005年にローリス・マラグッツィ国際センター内に開設した。全スタッフは教育者である。週に1日（木曜）だけ見学可能。事前予約により、保護者、地域、教師等様々な人々に開かれている。実際に展示されていた資料は、現在ローリス・マラグッツィ国際センターで開催されている展覧会に関する資料、世界で発行されているレッジョ・エミリアの本、ジャンニ・ロダーリの研究、レッジョ・エミリアのイタリアの本、今テーマにしている内容の本、今後インスパイヤしていく資料、全ての学校の

ドキュメンテーション、教育理論の本などに分かれていた。

補足：ブルーノ・ムナリーは今後インスパイアする本のコーナーに置かれていた。訪問当時、ローリス・マラグッツィ国際センターにあるアトリエのテーマ「歯車」にもムナリーの本“Le Macchine di MUNARI”が展示されていた。

所感：初めての訪問であった。ドキュメンテーションを資料として保存するだけの施設かと思っていたが、資料を生きたものとして解釈し、現代や未来の教育について常に研究をしていることがわかった。教育は時代や子どもで常に変化していかなければならないと考えるレッジョ・チルドレンの研究の実際を知ることが出来た。



□ミラノ・ビコッカ大学付属乳児保育所視察研修

日時：2月14日（金）10時～13時

場所：Via Privata Raffaello Giolli, 20162 Milano

講師：リエラブテラ先生 ルイーザ・セッカ校長 スザンナ・マントバーニ教授（ミラノ・ビコッカ大学の教授でローリス・マラグッツィと親交があった。）

内容：この乳児保育所は、ミラノ・ビコッカ校のスピンオフ企業であるバンビーニ・ビコッカ社がピレリ社と共同で推進している企業間託児所である。生後3か月～3歳まで70人弱が利用している。ビコッカ大学の職員や学生の子もだけでなく、ミラノ市の子どもも利用できる。R・マッサ教育人間科学部（科学総監督のスザンナ・マントバーニ）が監督をする実験的保育所としての役割もある学校である。保育士のためのトレーニングも行っている。幼児学校は別の場所にある。

【保育の様子を見学・ビデオ鑑賞と質疑応答】

小グループに分かれて、①保育の様子の見学と②昼食の様子の見学をおこなった。私は①は屋外で遊ぶ幼児の様子を見学した。子ども達は、落ち葉を拾ってバケツに入れて遊んでいた。幼児5人に教師1名配置。教師は子どもに多くの言葉かけをしていた。施設の作りは家庭的な雰囲気を大切にしていた。②はミラーガラス越しに子ども達が昼食を食べる様子を見

学した。食器はプラスチックなど使わず、陶磁器を使い、カトラリーも少し小ぶりなだけで大人と同じ形のものを使っていた。食べたくない児童がいても、特別な対応はせずにはいた。幼児達は自分で食べ、片付けも行っていた。子どもの席は決まっていなかった。その後、別室にて活動の様子のビデオ鑑賞とスタッフへの質疑応答が行われた。カトラリーを大人と同じ素材のものを使うことについては、使いづらくても待つことを大事にしていること。また、ドキュメンテーションは、年少クラスは年3回。年長クラスは年2回まとめていること。保護者に対してはウェブで連絡すること。壁面のドキュメンテーションの更新は頻繁ではなく、観察メモは保育者がとっており、集団による振り返りは義務付けされていないことなど回答があった。

所感：日本とイタリアの保育の違いを感じる場面も多かった。保育衛生や食事について、日本の細やかな保育の良さを感じた。イタリアでは、トイレにコップをおいて、のどが乾いたらトイレにある蛇口から飲む。日本では衛生的にその様なことはしない。日本では、おむつは、自分でできるようになる年になるとパンツ式を用意する。イタリアでは、早めにおむつを取るためと経済的理由から、パンツ式は使用しない。昼食時、日本では食べたくない幼児にも配慮をするが、イタリアでは特別なケアはしない。個人の意思を尊重する。文化の違いがあるが、日本の保育者たちには自国の保育の質の高さに自信をもってほしい。

参考資料：藤田寿伸(東京成徳大学)記録 日本語訳

まとめ：研修を通して、教育の専門の研究者の方々、保育者の方々と交流をもち、日々論議しあったことはとても貴重な経験であった。自分の今後の目標のために、自分が行うべきことを明確にすることができた。アトリエリスタは、アーティストとして存在すること。アトリエは研究をするラボである。また教育には空間づくりが重要であること。子どもは生まれた時から探究者である。大人もワクワクして一緒に探究すること。なにより、美しいことを大切にしていること。レッジョ・エミリア・アプローチが大切にしていることが明確になった。イタリアと日本の文化や社会は異なる。今後、レッジョ・エミリア・アプローチの哲学を大切にして、日本の文化に基づいた、日本の子どものための教育を考えていきたい。そして、多くの人と自分の考えを共有して仲間をつくり、どんな子どもも学ぶ権利を尊重された図工教育を行っていきたいと決心することができた。深い学び合いの研修にお誘い下さった森真理先生に感謝申し上げる。

6. レッジョ・チルドレン主催の講演会・見学会

ミラノ滞在中、レッジョ・チルドレン主催の講演会や見学会に個人的に参加することができた。ミラノからレッジョ・エミリアへは電車でも1時間半ほどだ。ローリス・マラグッツィ国際センターは、レッジョ・エミリアの駅から徒歩5分で行くことができる。

□Evento di lancio del progetto “NewsWise Italy” à Reggio Children

日時:2024年10月3日(木) 17:00~18:10

場所:レッジョ・チルドレン ローリス・マラグッツィ国際センターよりオンライン配信

対象者:イタリア小学校教育関係者

登壇者:

Claudia Giudici - レッジョ・チルドレン ペタゴジスタ 会議の進行

Lucia Jux - Guardian Foundation の NewsWise プログラムマネージャー

Giulia Gelmetti - Open the Box のプログラムマネージャー

Nicola Bruno - Dataninja の創設者および Open the Box のディレクター

Stefano Moriggi - Unimore (モデナ・レッジョ・エミリア大学) のデジタル市民権に関する准教授

Ellie La Resca - Guardian Foundation の Primary Education (初等教育) 部門の責任者

* Guardian Foundation: イギリスの主要メディアである「The Guardian (ガーディアン)」が設立した慈善団体

* Open the Box イタリアのデータリテラシーとメディアリテラシー教育を提供するプロジェクトで、特に偽情報やフェイクニュースに対処するための教育を行っている。

* Dataninja: データジャーナリズムやデータリテラシー教育に焦点を当てたイタリアの組織

* Unimore: モデナ・レッジョ・エミリア大学 (Università degli Studi di Modena e Reggio Emilia, Unimore) 教育学部

参加者: オンラインで50名程度

内容: イギリスで取り入れられている NewsWise プロジェクトが、イタリアでも2025年から導入される。そのスタートとなる会議であった。NewsWise は、イギリスの多くの学校で取り入れられ、7歳から11歳を対象にした無料ニュースリテラシー教育プロジェクトである。この教育を通して、子ども達がニュースに対して、批判的な思考や事実確認のスキルを習得し、最終的には、子どもが自分達で記事を書いて発信する能力を身に付けるものである。

NewsWise プロジェクトについての説明、デジタル市民権、ニュースリテラシーについても論議された。2025年には教師向けの講習がレッジョ・チルドレンにて開催される。このプロジェクトはイタリアでは、Dataninja および Reggio Children と共同で行われ、Unimore (モデナ・レッジョ・エミリア大学) の Stefano Moriggi 教授が科学的なコンサルティングを行う。

所感: 小学生対象にしたニュースリテラシー教育 NewsWise の活動と、世界でのニュースリテラシー教育の動きを知ることができた。レッジョ・チルドレンが、ニュースリテラシー教育を

通して、ニュースを理解し、批判し、自らニュースを作る過程で、探究の学びにつなげることを小学校教育で考えていることが分かった。これからの教育を考えるレッジョ・チルドレンの姿勢を知ることができた。世界でニュースリテラシー教育がどのように行われ、子ども達の権利として認められているのかを知ることで、この分野での日本の教育の遅れや今後の可能性について考えることができた。ニュースを通しての教育は、日本での探究の学びにも取り入れることができる。正しいニュースを自分で理解し、自信をもって発信することは世界中の子どもたちにとって必要なことである。また、子どものうちに身に付けておきたい能力である。日本の教育にどのように活かすことができるのか、今後も情報を集めていきたい。

□Visita guidata alla mostra “Un binomio fantastico - Gianni Rodari e Reggio Emilia”

日時：2024年10月20日（日） 11時30分～12時30分（ガイドツアー）

場所：レッジョ・エミリア ローリス・マラグッツィ国際センター内

対象者：事前申し込み20名限定

講師：Maddalena Tedeschi（元教師 ガイドボランティア）

同行者：川嶋仁香（女子美術大学芸術学部美術学科洋画専攻3年生）

内容：レッジョ・チルドレンの教育思想に深く影響を及ぼした、イタリア児童文学者ジャンニ・ロダーリと彼の著書「ファンタジーの文法」とレッジョ・エミリア・アプローチについての展覧会ガイド付きツアーへの参加。通常、日曜はローリス・マラグッツィ国際センターの休館日である。当日は、市民、親子、教師、学生などが参加できるワークショップやガイドツアー（ウェブ事前申し込み）が同時開催されていた。年間4回の同様の市民向けのイベントが企画されていた。

1972年、レッジョ・エミリアでローリス・マラグッツィがジャンニ・ロダーリを招待して行った講演の様子（Raiのビデオ）や、ロダーリの教師時代の資料、ファンタジーの二項式について、現在に至るまでレッジョ・エミリア教育でファンタジーの二項式が使われている実践の様子や子ども達の表現を見ることができた。ガイドツアーは、参加者同士で自己紹介をしてリラックスした雰囲気ではじめた。ガイドツアー後、ローリス・マラグッツィ国際センター内のアトリエと移転したばかりの Remida を見学した。

所感：『ファンタジーの文法』の日本語訳を愛読しているが、ロダーリが実際に子どもたちの輪の中に入って、子どもと同じ目線で対話をするビデオを見て、ロダーリの子どもとの接し方を知ることができた。また、1942年—43年のロダーリ教師時代のメモ書きなどを見て、彼の教育の根幹に触れることができた。また、「ないものをおそれるな」「二項式には一定の距離がある必要がある」という言葉が印象に残った。想像力を育てるためには、今まで

あるもの、知っているものから逸脱して、ないものを生み出すこと。それは、教育現場では、子どもたちにとって勇気のいることかもしれない。しかし、教師が子どもたちの想像力を引き出し、奪わないようにすることが重要である。ファンタジーの二項式を、今後日本の教育現場でも実践していきたい。

今回のガイドツアーは、市民などに広く開かれたものであった。そのため、ローリス・マラグッツィ国際センターのアットホームな雰囲気を感じることができた。



7. その他の活動

女子美同窓生の古山春香さんのお誘いにより、ミラノの文化交流イベントに参加することができた。異国の地で活躍する日本人と多く知り合うことができ、その後のミラノ滞在中も交流をもつことができた。イタリア文化、日本文化について考えるきっかけを頂いた。ご縁を繋げて下さった古山さんに深く感謝している。

□ミラノパナソニック商品記者発表 表千家デモンストレーションの手伝い

日時：2024年10月15日（火）

準備15：00 デモ16：45～17：15 片付け終了18：00

場所：Milano Via Gastone Pisoni イベント会場6階

対象者：イタリア人記者20名程

参加者：ミラノ表千家 杉山やすこ先生 古山春香さん エンリカさん

内容：パナソニック髭剃り新商品記者発表会で、茶道のデモンストレーションを表千家の方々が行った。古山春香さんがミラノ表千家社中であり、私が裏千家茶道経験者であることから、お手伝いをさせて頂いた。古山さんからお借りした着物を着て、記者発表会場に向かった。古山さんと私は、記者の方々にお菓子と抹茶を提供し、片付け等を行った。記者発表会は他に、フェイスヨガやケータリングが提供された。

所感：イタリアの記者発表会を初めて経験することができた。イタリア人が日本文化について

てどのように興味を持って参加するのかが知ることができた。商品発表に茶道のデモンストレーションを行うとは面白い企画である。杉山先生のお話では、イタリア人は異なるものを組み合わせて新しいものを作り出すことが得意なようだ。イタリア文化の一面とイタリア人の考えの一旦を知る経験であった。また、抹茶は世界的にも広く親しまれていることを再確認することができた。



表千家茶道のデモンストレーション



ミラノ表千家社中の方々と

□ミラノ日本人学校 La Festa 着物着付けの手伝い

日時：2024年11月24日（日）

準備 11:00開始 開催 12:00～16:00 片付け終了 17:30

場所：ミラノ日本人学校 3階5年生の教室

対象者：La Festa 来場者 申し込み制（8ユーロ）

実施者：北イタリア日本人会 8名

参加者：53名

〈詳細〉

内容：ミラノ日本人学校 La Festa で着付けコーナーの手伝い。最初に、参加者は日本髪へのヘアセットをしてもらい、好みの着物を選び、着付けをしてもらう。着付けは一人20分から30分ほどである。その後、草履を履いて記念撮影をして、着替えをして終了。私は、着物の着付けの補助や片付け等を手伝った。

所感：今回の手伝いは女子美同窓生で北イタリア日本人会の野尻奈津子さんと古山春香さんのお誘いにより実現した。着物の着付けは、La Festa 人気の活動として定着し、毎回楽しみに訪れるイタリア人が多いと聞いた。ヘアセット、着付け、写真撮影と全ての活動が丁寧に日本人のおもてなしの精神を見ることができた。イタリアの地でイタリア人に喜ばれる文化交流を実践している方々に出会い、日本人としての細やかな配慮に尊敬の念を抱き、また日本

文化に誇りを抱いた。



8. ミラノの生活

半年間のミラノ都会生活は、慣れない言葉、初めての国、文化、人間関係の中で緊張と発見の毎日であった。私が住んでいたアパートは、幹線道路に面していた。ミラネーゼの運転は少々荒い。車のクラクションの音もパトカーのサイレンも何時でもお構いなしが普通である。3番トラムと24番トラムにすぐに乗ることができる便利な場所にあった。学校へは3番トラムに20分ほど乗って終点ドゥオーモまで行き、そこから徒歩で通った。特に夜は危険でミラネーゼも利用しないという悪名高い90番・91番バスは幹線道路に24時間走っていた。15分ほど歩くと、地下鉄の緑線ロモロ駅へ到着する。移民が多く住む場所で、かつては危険な駅だったようだ。今でも、人のいない場所は一人居ては歩かない方がいいと現地の人からは忠告を受けた。ミラノの街並みは美しいが、衛生的ではない。特に清潔なトイレを探すのに苦労した。当たり前と思っていた安全で清潔な日本の生活に改めて感謝をした。昔ながらのアパートにはエレベーターはなく、私の部屋は4階にあった。内部は改装されていて清潔で、民泊で利用されているためリネン類以外の生活に必要なものは揃っていた。日本では便利さや快適さを住まいに求める。イタリアは全てのことにおいて、機能よりも美しさが重要なようだ。換気や騒音対策は考えられていない。住環境に対する考え方が日本と異なることを住んでみて実感した。

アパートから徒歩5分の所に大手スーパーマーケットが2軒あった。食材を買って、自炊をしていた。食材の物価は日本とそれほど変わらなかった。大きくてカラフルなイタリア野菜や果物を購入することは楽しかった。11月頃まで、大家さんご夫妻が隣室に住んでいた。反対側には、イタリア人男性が住んでいたが、マンマが時々遊びにきていた。ベランダに洗濯物を干しながら、陽気なマンマと世間話をした。都会の喧騒の中、アパートでの生活は安心できるものだった。近くには、大きな公園があり、土曜日の朝はメルカートで賑わう。ブレラ国立美術学院の制作で使用する自然素材を集めるため、その公園へは度々出かけた。少し足を延ばしてナヴィリオ地区まで散歩に行くこともあった。かつてのミラノの風情が残る下町だ。月に一度の日曜日には、骨董市がでる。

ミラノ生活で一番驚いたのは、デジタル化が進んでいることだ。公共交通機関、スーパーなどだけでなく、メルカートの買い物、1ユーロのカフェでも、全てクレジットカードを利用できる。また、アプリの利用が普及していて、定期券のチャージ、電車のチケットの購入も窓口へ行く必要はない。ただし、納税者番号（Codice Fiscale）に紐づけされることが多く、留学生であっても、その取得が必須であった。デジタル化は、EU 統一とパンデミックの後押しがあったようだ。デジタル化によって、会話をせずに簡単にできることが多く、世界の人々の交流の障壁が少なくなっていることを感じた。



アパートの窓から



アパート内部



土曜日のメルカート



ナヴィリオ地区の骨董市

9. 今後の展望・目標

イタリアのレッジョ・エミリア教育に憧れて新しい図工教育のヒントを探しにイタリア留学をした。レッジョ・エミリア・アプローチは、哲学であって方法はない。しかし、何か方法があるのではと思っていた。しかし、なぜ方法ではなくアプローチなのかを、ミラノで考えた。ブレラ国立美術学院で学び、イタリアに住んでみて分かったこと。個性を尊重するこの国では、個人が自己責任の下で自分の考えたやり方を、自信をもって行う。誰かが考えた方法をそのまま遂行することが苦手な国民だ。方法にすることで、発案者が考えた真の思いは次第に変化してしまう。モンテッソーリ教育やムナーリのワークショップの現在を考えると、その変容を教えてくれたイタリア人は多かった。また、イタリア人は哲学で物事を考える。ブレラ国立美術学院でも言葉の使い方にそのことを感じることは多かった。SiかNoの答えが欲しくて先生に質問をしても、時に答えは哲学的で明確ではない。でも、さらに何かを私に考えさせる。絵画技法にしても、技法より哲学が先にあった。だからこそ、ローリス・マラグッツィは教育に必要な真の部分を変化させないために、方法ではなく哲学を伝え残したのではないかと個人的に考えた。『理論と実践』レッジョ・エミリアで言われる大切なことだ。哲学があれば、やり方はそれぞれでよいのかもしれない。そう気づき、イタリアに来る前より気持ちが楽になった。

そして、2つの目標を明確にすることができた。それは、『日本の新しい図工教育を考えて

広めていくこと』と『日本の教育現場にアーティストを送ること』である。

一つ目の目標は、イタリアへ来るきっかけとなる目標であったが、より具体的になった。社会は多様化しIT化が進んでいる。個性は尊重され、人間にしかできない能力を育むことが必要とされる。探究の学びで育まれる、自分で問いを立て、考え、解決する力が必要とされるだろう。それは、創造する力、生きる力を得ることだ。今回、レッジョ・エミリアで明確に言われたことは、「社会は変化し、子どもも変化する。教育も時代に合わせて変化しなければならない」と。日本の教育も変化する時だ。私は図工教育から教育を変えていきたい。未だに作品を完成させること、教師の評価を気にする子ども、という状況が見られる。しかし、表現に正解はない。表現する過程を大切に学ぶを子ども達と一緒に探究していきたい。表現をすることは自分を知ることでもある。答えは自分の中に見つけることができる。私が考えた図工に探究の学びを取り入れる一つのアプローチは、アーティストの表現の過程を取り入れることである。ミラノ留学で出会った、ブルーノ・ムナーリの教育ワークショップ、ジョセフ・アルバースの教育を図工教育に取り入れていきたい。さらに、パウル・クレーなども研究したい。その時、大事にしたいことは、レッジョ・エミリアの哲学やアーティストが考えた哲学を解釈し、現代の日本の子ども達に合うように実践することである。イタリアと日本の社会は異なる。日本人に合った考えで授業を組み立てていくべきだと思う。新しい図工教育を子ども達に実践しながら、同じ考えを持つ仲間を増やして、活動を広めることも行いたい。そのために、自分の実践を発表して形にまとめていきたい。

二つ目の目標は、アーティストをアトリエリスタとして教育現場に送ることだ。レッジョ・エミリアのアトリエリスタは述べていた。「子どもは研究者（探究者）である。アーティストは子どもと同じように日々探究する人である。アトリエリスタ（アーティスト）は子どもと一緒にワクワクするのだ。」と。イタリアのアトリエリスタは、アーティストとして教育現場に存在する。アトリエリスタとして特別な教育は受けていないと今回の研修で知った。また、ブルーノ・ムナーリは、「道具についての知識、技法についての知識、これら2つは基本である。」と著書『ファンタジア』の中で述べている。表現する過程を子どもと一緒に楽しむことは、表現の専門家だからこそできる。レッジョ・エミリアでは、教育の専門家ペタゴジスタとアトリエリスタと保育者が協力して教育に携わっている。しかし、日本人の気質や社会を考えると、アーティストはある程度教育現場についても、学んでいることが必要と私は考える。日本の大学でアトリエリスタを養成する学校はない。ぜひ女子美術大学にアトリエリスタの養成を考えて欲しいと願う。建学の精神にも、「専門の技術家・美術教師の養成」がある。芸術を学んだ人ができる美術教育があると考え。また、アーティストが生活する選択肢が増えることにもなる。レッジョ・エミリアのアトリエリスタは、アーティスト活動と教育活動を同時に行っている。アーティストが教育現場に存在する未来の社会を望んでいる。

真に生きる力をつけた子ども達が増えることは、日本の明るい未来を作ることと信じている。そのために教育の力は大きい。図工教育から新しい日本の教育のためにできることを実践していきたい。一人では、できることは限られている。仲間を作って皆と協力していきたい。



SPAZIO MUNARI

おすび

2024年9月にミラノの地に降り立った時、一人異国で生活することに心細く思った。ブレラ国立美術学院での諸手続き、滞在許可書など日本のようにスムーズに進むことが一つもない。コミュニケーションは思ったようにいかない。説明しないと理解してもらえない。今までの自分の考えを一掃される経験だった。

しかし、しばらくたってその理由が見えてきた。日本は平均的な教育をされている。ある程度同じ知識が皆に備わっている。しかし、イタリアは個性が尊重され、凸凹している。ブレラ国立美術学院でのある共同制作で、大きなスチレンボードに一辺30センチの正三角形をいくつもかいて切るという作業があった。大きな三角定規一組と1mの定規があったが、学生達が切った三角形の数と余ったスチレンボードの形が様々であった。日本人なら、小学校で正三角形の作図法を学び、大人になってもいくつかの方法で同じように作図ができる。しかし、イタリア人のやり方を見て驚いた。方法はみな自己流で私が算数の授業で学んだものと異なっていた。これは、学び方の違いや個性を尊重するお国柄のためとわかった。イタリアは算数であっても、口頭試験で行うらしい。自分の考え方を皆の前で発表する。日本は考え方より、ペーパーテストで正解を答える。日本は、国民にある程度同じ知識が備わっているから、システムを構築し易くルールを決めやすい社会である。しかし、個人の考えを述べる力や個性は伸びにくい。人と違うことに不安すら感じる。イタリアは、みな違う意見を持っているから、システム化し難い社会であり、全てがスムーズに進まない。でも、個性を伸ばす教育がされているため、時に大天才も生まれる。また、それぞれが違うことが当たり前である。イタリアと日本の長所、短所を知ることができ、互いの教育の背景を考え、理解を深めることができた。

また、イタリアの地で再び繋がる知識、経験、人の縁などを感じる機会が多かった。ある日、ミラノの司教区博物館の「ボッティチェリ展」に行った。ウフィツィ美術館にある『マギの礼拝』が展示されていた。展示構成が素晴らしかった。作品の空間分析をして、平面図に起こし、描かれた人々を3次元空間に配置して解説を付けて見せていた。私が女子美の学生時代に没頭した、図学の技法が使われていた。また、ブレラ絵画館には、修復技法を公開していた。それも私がかつて行っていた絵画修復の知識によって、理解を深めることができた。留学前は想定していなかったが、茶道経験も活かされた。裏千家の磯先生に出会い、ミラノ裏千家道場に通い、補習校で授業を受け持つことができた。その他にも、久しぶりにイタリアで再会できた友人、同窓生の方々と交流ができた。新たに親しくなったミラノの方々のなかにも、互いの共通点を見つけて驚くことが度々あった。一人でイタリアへ来たように思っていたが、今まで自分に関わって支えて下さった人々の縁や経験があって、ミラノに來ていると実感した。あらゆる経験、出会ってきた人々を思い出し、全てに感謝をした。そして、ミラノで再び繋がる縁と新たに繋がった縁をこれからも大切にしようと思った。

ミラノでの贅沢な学びの時間は自分にとって貴重な半年間であった。日本にいと日常に追われて考える時間は十分に持てない。異文化の中で多少のカルチャーショックを受けて自分の考えを一掃し、新しい考えや知識を得て、また今までの縁や経験を思い出し、次のステップを見出すことができた。今は過去、現在の全てに感謝をしている。ご縁を大切に、未来に繋げていきたい。